

## はじめに——エンブソンへの誘い

### 1

ウィリアム・エンブソンは、一九〇六年、英国ヨークシャーのトレント川とウース川が合流してハンバー川になるあたりに、広大な土地を所有する紳士階級の家系に生まれた。

一九二〇年、名門パブリック・スクールとして知られるウィンチェスター・コレッジに入学、得意な学科は数学と科学であった。ウィンチェスターに在学中、早熟な彼はすでに科学的合理主義に徹していたらしく、キリスト教の神は邪悪な神だと考えていたという。一九二四年、リチャードソン数学賞と数学専攻学生奨学金を得て、翌年十月、ケンブリッジ大学モードリン学寮<sup>コレッジ</sup>に入学した。

四カ月後の一九二六年二月三月、恒例のトリニティ学寮主催の〈クラーク連続講義〉でT・S・エリオットは「十七世紀の形而上派詩人たち」について論じた。このころエリオットの詩と批評をむさばるように吸収しつつ

あつたエンブソンは、講義には出席しなかつたが、エリオットを囲む座談会に出席し、シェリーの詩のイメージについてのエリオットの論に熱心に耳を傾けた。後年、彼は「わたしの精神がどこまでエリオットによつてつくられたか、はつきりとは言えないが、彼から受けた影響は鋭く浸透する体ていのものであつた」と述べていて、エリオットの影響は『曖昧の七つの型』にも歴然としてゐる。

ケンブリッジ入学三年後の一九二八年秋、エンブソンは数学から英文学の専攻に転じた。彼の合理的な知性は、当時のケンブリッジの実証主義的な知的風土——バートランド・ラッセルやヴィトゲンシュタインが拓きつづつあつた論理実証主義的地平、ジェイムズ・フレイザーのケンブリッジ派人類学、ケインズ経済学の一般理論、I・A・リチャーズの意味論と科学主義的文学理論などに強く引かれ、リチャーズに師事して英文学を専攻することを選んだのである。現実世界の複雑さと不条理に立ち向かうには、純粹に理論的な数学よりも不条理を内包する詩によるべきだと考えたのかもしれない。『曖昧の七つの型』の原形となつたエッセイを、リチャーズ先生に提出したのは、このころのことである。一九二九年二月、「シェイクスピアのソネット一六番における曖昧」と題するエッセイを前衛的文芸誌『実験』に発表。これは、リチャーズに提出したエッセイの一部であらうと思われる。六月、英文学（トライポス）第一部（卒業試験）で優フアーストの成績を得、同時にモードリン学寮賞を受賞、モードリンの準フェローに選ばれたが、七月、所持品から不品行を疑われて採用を取り消された。

ケンブリッジをはなれたエンブソンは、ロンドンに出てフリーランスの著述家として活動をはじめた。このころT・S・エリオット、ヴァージニア・ウルフ、ハロルド・マンローらから啓発を受けたらしい。十一月、「エリオット覚え書き」を『実験』に発表（のち、『曖昧の七つの型』に組み込まれる）。翌三〇年十一月、『曖昧の七つの型』が出版され、批評家エンブソンの名が確立された。

『曖昧』出版以後のエンブソンの人生は、波瀾に富むものであつた。一九三一年、師リチャーズの推薦で来日、三四年まで、東京文理科大学（現・筑波大学）と東京帝国大学（現・東京大学）で教えた。いったん英国に帰つ

たあと、一九三七年には中国の北京大学に招かれたが、任地に到着したときにはすでに日中戦争がはじまっていて、日本軍が侵攻し、大学は閉鎖されていた。エンブソンは、当時中国に滞在していたリチャーズ夫妻とともに各地を旅しつつ南下、南部の奥地に避難した仮設の大学で教えた。貧しい食事、日本軍の空爆。自分の部屋さえなく、夜は黒板をベッドに眠ったが、そうした生活の中でもエンブソンの知性は閃きを失うことなく、ひとりの時間には数学の問題を解き、世界と言語と文学について思索を深め、のちに『複雑語の構造』を構成することになる論考の執筆をすすめていた。一九四七―五二年にもエンブソンは中国で教えたが、このときにはこの国内戦と共産党の勝利による中華人民共和国の誕生（一九四九年）を目撃した。一九五二年に英国に帰り、五三年秋から七一年の引退まで、シェフィールド大学教授の席にあった。一九八四年歿。

## 2

『曖昧の七つの型』は、〈初版への序〉でエンブソン自身が記しているように、I・A・リチャーズの文学理論から出発したものであったが、文学研究に対するリチャーズの態度は、一言でいえば「科学主義」であった。彼は、それまでの印象批評ないし鑑賞批評を棄て、文学とは、作品を媒体として作者の経験が読者に伝達されることだと考え、この伝達のプロセス——作者の中さまざまな衝動ないし欲求の調和的体制化が作品を通じて読者の心の中に再現されるときの一連の心理的現象——を、因果関係の連鎖として説明した。同時に、リチャーズは、すぐれた文学作品には、われわれがふつうにもつよりも多くの衝動を調和的に満足させるような体制化が含まれていると考えた。たとえばアリストテレスの言う「恐怖」と「哀憐」を同時に実現する悲劇、あるいは反対衝動を同時に満足させるようなアイロニーを含む詩は、感傷だけしか喚起しないセンチメンタルな詩よりも大きな価値をもつものだとした。衝動の体制化という考え方による価値論と、文学作品による価値の伝達についての理

論——これがリチャーズの『文芸批評の原理』（一九二四年）を支える二つの柱であった。

リチャーズのもう一つの発明である「実践批評」は、彼の科学主義文学理論に対応するいわば実験部門であった。リチャーズは、英文学（トライボス）の必修科目として設けられた「実践批評」のクラスで、彼のいう「プロトコル」（作者の名を伏せた詩）を学生に読ませ、その解釈——「この詩は何を言おうとしているのか」、「世界と人生に対してどういう態度をとっているのか」——を書かせ、詩が個々の読者によってさまざまに読みとられるものであることを実証的に示してみせた。その結果をリチャーズは、一九二九年の著書『実践批評』にまとめ、そうした読者反応の多様性は、読者の個人的体験からくる連想や無意識的抑圧、つまりは読者の認識が内包する方向性からくるものだと言じた。

エンブソンは、「実践批評」のクラスの熱心な出席者ではなかったが、リチャーズの文学理念には共鳴していた、たまたまローラ・ライディングとロバート・グレイヴズの『モダニスト詩の展望』（一九二七年）を読んで、E・E・カミングズの句読点のない短詩とシェイクスピアのソネット一二九番を並べて分析した章に触発され、リチャーズ先生の前で、「まるで手品師のように」シェイクスピアのソネットから「元気のいいウサギをつぎ取り出して」みせた。リチャーズはエンブソンの才能に一驚し、分析をつづけるよう励ました。二週間たつと、エンブソンは大部のタイプ原稿をかかえてリチャーズの前に現れた。『曖昧の七つの型』の原形であった。

### 3

エンブソンの「曖昧」論は、リチャーズの〈アイロニー〉理論を、同じリチャーズの「実践批評」の手法で拡大、発展させたものと見ることができるといえる。彼は、「二つの表現に対していくつかの可能な反応の余地があるとき、言葉のもつそのようなニュアンス」を「曖昧」とよび、詩の言語のこの意味での「曖昧」にこそ詩の美しさがあ

る、と主張した。詩は、神秘的な〈雰囲気〉や靈妙な〈純粹音〉の問題ではない、「説明されない美はわたしをいらだたせる」、と彼は書き、「曖昧」を「論理的混乱の程度に従って」七つの型に分類した。

エンブソンの議論を読む前に、あえて要約を掲げてみると――

第一の型。一つの語あるいは文法構造が同時に数個の効果をもつ曖昧。一例として、シェイクスピアの『ソネット集』七三番の「荒涼たる唱歌隊席、少し前には小鳥が歌っていたのに」の行について、数個の類似点をもつ「二者の」比較が論じられ、この詩人のナルシズムや「少し前」の僧院破壊など、歴史的、社会的コンテクストを持ち込むことから生まれる曖昧が指摘される。

第二の型。二つあるいはそれ以上の可能な意味が一つの意味の中に集約され「多義性が」解消される曖昧。シェイクスピアのソネット一六番における文法（構文）の曖昧の分析を含む。

第三の型。たとえば地口や寓意のように、一見結びつきのない二つの意味が同時に与えられている曖昧。

第四の型。複数個の意味がそれぞれと和せず、作者の複雑な心理状態を示す曖昧。たとえばシェイクスピアのソネット八三番に見られる詩人の自己主張と自己卑下の混淆。

第五の型。作者が書くという行為の中で自分の考えを発見していくとき、あるいは作者が自分の観念を全体として心に思い浮かべていないときに、偶然に生まれる曖昧。

第六の型。述べられていることが矛盾あるいは不適切で、読者が解釈を考え出さなければならないような曖昧。「ブーライカは厳密に言って美しくはなかった」のような。

第七の型。語の二つの意味、曖昧の二つの価値が対立したまま、全体的な効果として作者の心の中の基本的分裂を表わすような曖昧。この型は、最も大きな論理的混乱を含む曖昧として最後におかれている。この型の曖昧の例として、エンブソンがとくに力を入れて分析しているのは、ホプキンスのソネット「まぐそ鷹」とジョー

ジ・ハーバートの「犠牲」で、これらの詩には、作者の中のフロイト的な対立が、異なった判断系によって強く欲望され、両方に適合する言葉によって同時に語られている、と言う。

フロイトの深層心理学は、イギリスではすでに一九一〇年ころから一般に知られるようになっていた（ジョイス、ウルフ、ロレンスといったモダニストたちもフロイトを強く意識していた）が、ゲシュタルト心理学を文学批評に応用したリチャーズよりもエンプソンにおいて、フロイトの深層心理学は大きな意味を与えられた。（エンプソンにおけるフロイディズムは、のちに『牧歌の諸変奏』（一九三五年）における『不思議の国のアリス』の有名な分析としてさらにはつきりと現れることになる。）

#### 4

フロイディズムのほかにもう一つ、エンプソンがリチャーズと意見を異にする問題が『曖昧』には含まれていない。リチャーズの言う「指示言語」と「喚情言語」の問題である。

リチャーズは、言語の用い方を「指示的」referential と「喚情的」emotive に分け、論理実証主義者が言うような意味で指示の真実性が実証できるような陳述の言語を「指示的」、それに対して「人間は蛆虫だ」というような、事実についての陳述ではなく聞き手の感情を喚起するための言葉を「喚情的」と定義した。（詩や宗教の言葉は「喚情言語」ということになる。）だが、エンプソンにとっては、言語の「指示的」用法と「喚情的」用法は分離できるものではなかった。複雑な理念は「事実と判断を内包する一種の感情として記憶される」もので、単純に「喚情的」な言葉の用法というものはない、むしろ、「喚情的な効果は意味の構造によって生み出される」、とエンプソンは考えていた。

思想と感情は不可分のものというエンプソンの考えは、T・S・エリオットの「感性の分裂」論を取り込んだ

ものであったかもしれない。エンブソンは、エリオットから受けた大きな影響を自ら認め、『曖昧』でもエリオットの詩から幾節かを引用して論じているが、エリオットの「形而上派詩人論」（一九二一年）における「感性の分裂」論——十七世紀の形而上派詩人では思想と感情は統一されて、彼らは「思想を薔薇の匂いのように感じることができた」が、ミルトン以後、思想と感情は分裂してしまったという論——における「感性の統一」の觀念をエンブソンは受け入れ、自分も詩人としてジョン・ダンに似た形而上的な詩を書きながら、批評家としてエリオットの言う「感性の統一」を人間精神の正しいとらえ方と認めていたように思われる。思想と感情、「指示言語」と「喚情言語」の統一と分離の問題は、単に詩の言葉の問題にとどまらず、「擬似陳述」（指示的陳述の形をとった喚情的表現）と「信念」の問題につながっていて、リチャーズが、エリオットの『荒地』は信念とは無関係の「觀念の音楽」であると論じたのに対し、エンブソンは『曖昧』第八章で、詩と信念の分離に反論している。

## 5

一九三〇年に『曖昧の七つの型』が出たあと、アメリカで新批評が澎湃として起こり、一九三〇年代から五〇年代まで、アメリカ全土の大学で文学教育における支配的理論となり、その波は第二次大戦後の日本の大学にも押し寄せた。彼らはリチャーズからアイロニー論を、エンブソンからは実践的分析手法を借用して、詩のテクストにパラドックスとアイロニーと多義的イメージを発見することをめざす精読を、文学教育の定式として確立した。この流派を代表するクリアンス・ブルックスの『巧みに造られた壺』（一九四七年）や、彼とロバート・ペン・ウォレンの共著になる教科書『詩の理解』（一九三八年）は、リチャーズとエンブソンからの発展というよりも、むしろこの二人の英国人の理論と方法を単純化し、パターン化して、アメリカ型の教育に利用したものであった。それは、エンブソンの「曖昧」という広い概念を「パラドックスの言語」に圧縮し、エンブソンでは

一つのものであった詩の言語と日常言語を別々のものに切りはなしてしまった。彼らはまた、文学研究から歴史的コンテクストと〈作者〉を排除し、〈詩〉を現実から隔離し、社会に対してはたらしきかけの力をもたぬものにしてしまった。その同時代性ゆえに、エンブソンを、さらにはF・R・リーヴィスまでも新批評家とみなすことがあるけれども、これらケンブリッジの批評家たちは、一九三〇年代のマルクス主義の高まりに背を向けて非社会的、非歴史的な文学観を説いたアメリカの新批評家たちとはまったく別の種族であった。エンブソンの『曖昧』は、むしろ、テリー・イーグルトンも言うように、「新批評の原則に対する仮借なき反論として」読んだほうがいい。イーグルトンは言う――

彼〔エンブソン〕は一貫して、〈新批評〉流の熱にうかされた文学神聖化の試みに、英国的常識コンセンサス派の側に立って冷水を浴びせかける。……エンブソンにとり、文学作品は、不透明な閉じられた対象ではなくて、あくまでも開かれている。テクストを理解することは、内的言語的一貫性をひたすら追いかけることではなく、テクストの言葉が社会的価値を帯びる一般的コンテクストを把握することであった。そしてそのようなコンテクストは、一つと決められるものではなく、いつも未決状態へと向う傾向にある。……エンブソンによれば、読者は、作品を読む際にさまざまなものを持ち込まないではいられないという。それは、作品の言説がおかれる社会的コンテクストの総体であり、また、何が意味のあることかを決める暗黙の諸前提である。〔『文学とはなにか』一九八三年。大橋洋一訳、岩波書店、一九八五年、新版一九九七年）

新批評の非歴史的で非政治的な詩学に対して、エンブソンの詩学は社会的、歴史的で、かつ民主的だとイーグルトンは言う。

新批評への反動として、文学研究に〈歴史〉を取りもどそうとしたのが、一九四〇年代、A・O・ラヴジョイの〈観念史〉の方法を取り込んだL・B・キャンベルやE・M・W・テイリヤードの〈歴史主義〉であった。さらに一九八〇年代には、この〈歴史主義〉を批判しつつ、七〇年代の脱デコンストラクション構築批評への反動として、ミシエル・フーコーやクリフォード・ギアツを援用した〈新歴史主義〉が力をふるった。それより前、一九六〇年代には、人文諸科学に支配的となった構造主義的風土の中で、文学研究にもソシュールの記号論が適用され、文学における意味生成メカニズムの理論が力をもつようになり、構造主義はさらに脱構築を代表とするポスト構造主義へと展開し、この流派の批評家ポール・ド・マンの理論では、テキストはそれ自体を脱構築し、テキストの意味はその存在を否定され、作品は記号と意味の無限の戯れの場とみなされることになった。だが、エンプソンの批評は、このような批評風土の変遷を通して強い支持を失うことはなかった。エンプソンと構造主義、エンプソンと脱構築について、以下に少し述べておきたい。

エンプソンと構造主義については、『構造主義詩学』（一九七五年）のジョンナサン・カラーが一つの証言をしている。カラーによれば、エンプソンの『曖昧の七つの型』は構造主義に立つ著作ではないが、構造主義文学理論でいう「文学能力」*literary competence* の概念を踏まえているという。たとえば『曖昧の七つの型』第一章におけるアーサー・ウエイリー訳の陶淵明の二行詩——*Swiftly the years, beyond recall. / Solemn the stillness of this spring morning.*——の分析〔第二章六〕は、文学テキストを読んで、そこに二項対立を見出し解釈を誘導する心のプロセスとしての「文学能力」を前提とした議論だ、とカラーは言う。

エンプソンと脱構築については、『作品鑑賞論集』（一九九六年）のクリストファー・リックスが、エンプソン

の『牧歌の諸変奏』（一九三五年）に脱構築を見出している。『牧歌』冒頭の「プロレタリア文学」の章でエンブソンは、トマス・グレイの「哀歌<sup>エレジー</sup>」を論じ、グレイのこの詩には、才能は世に出なくてもいい、世に出ないほうがいいのだ、と思わせるまやかしの政治思想、多すぎるブルジョワ・イデオロギーがある、と言っているが、同時にエンブソンは「しかも、ここに言われていることは永遠の真理である。……これを述べてもけつて政治的ではない。しかも、偉大な詩は……この詩のように……ブルジョワ的である」と論をつづけていて、こういうふうに「しかも」を重ねるエンブソンの議論の運び方には脱構築がある、とリックスは言うのである。『牧歌の諸変奏』についてのリックスの断定は、『曖昧の七つの型』の中の「解消されない矛盾を含む曖昧」の議論についても同じように言えるのではないかと思われるが、注目すべき点は、脱構築がテクストを矛盾した意味の戯れの場と見ることで認識論的無政府主義をつくり出すのに対し、エンブソンの『牧歌』あるいは『曖昧』は、終始、人間的な合理主義を信じ擁護しているということである。その意味で、脱構築を標榜する批評家たちはエンブソンより後退している、とリックスは断言する。

エンブソンは合理主義者であり、さまざまな世界観、価値観を公平に、理論的に把握することをめざしていた。合理主義に徹した率直な議論、それは一九二〇年代のケンブリッジの知的風土についてエンブソンが最も賞讃する点であった。エンブソンは、詩について「説明されない美はわたしをいらだたせる」と断言することから出発し、分析し、説明し、理論化した。『ポストモダンリズムについての真実』（一九九三年）のクリストファー・ノリスに言わせれば、エンブソンの『複雑語の構造』（一九五一年）は、「現代の文学研究に有害な影響を与えていると考えられる反合理主義的あるいは反啓蒙主義的傾向に対する本格的反論」となっている。

いま、言語の機能についての意識が文学理論や哲学的探求に深くかわるようになってこの時代に、われわれはもう一度エンブソンに帰ってみたほうがいい。『牧歌の諸変奏』におけるフロイディズムとマルキシズム

はいまもアクティヴな思想であるし、ノリスに言わせれば、『複雑語の構造』は「過去百年間の英国における文学理論の中で最高に独創的で、首尾一貫した仕事として群を抜いている」。そして、『曖昧の七つの型』はこれら一連の仕事の出発点だったのである。

岩崎宗治